

セッション「自由主義思想の射程」（世話人：森岡邦泰）では、自由主義思想の諸相を、地域的・時代的に対比的にとらえてその特徴を浮き彫りにすることを試みている。

さて本年は太子堂正称会員の司会のもと、林直樹会員の「1710年の公信用論と1720年の南海バブル」、安藤裕介会員の「フィジオクラットにおける富と主権の問題——モンテスキューを手がかりとして」の二報告を行い、26名の参加者を得て、活発な討論が行われた。

まず林報告では、ウィッグ（貨幣利害）対トーリ（土地利害）とコート（宮廷）対カントリ（地方）という、ふたつの思想的対立軸を前提としながら、南海バブル事件を思想史的に概観するに当たって有益であろうと考えられるいくつかの観点を提示しようとした。報告はレジュメに沿って口頭で行い、適宜板書を交えた。またレジュメには事件の主だった経緯を記した年表を付し、フロアの方々の便宜に供した。

南海会社はその設立当初から欺瞞的な組織に過ぎなかったという一面的な見方が通説化しているが、C. Wennerlind, *Casualties of Credit* (Harvard U. P., 2011) のように、豊富な一次史料を活用しながら当時の言説史をより多面的かつ動的に描き直そうとする研究がすでに現れている。これまで特にJ. G. A. ポーコックの17, 18世紀研究から影響を受けてきた報告者は、冒頭のふたつの対立軸の交錯を念頭に置き、この時代の錯綜した状況を広くその社会思想について複眼的かつ包括的に描写したいと考えている。想像や空想、あるいは夢想の力をどの程度まで容認するかは当時の論争における一大テーマであって、これをめぐる対立が同時代における党派のあり様を定めるひとつの要因となっていたことは、まず否めないだろう。想像や期待といった非実体的要素に依存した商業の広がりに対する警戒は、トーリの立場からというよりもむしろカントリの立場から引き出された。そしてウィッグのうちにもカントリは存立しえた。したがって、貨幣対土地という二分法のみで依拠して把握のできる思想領域は決して大きくはない。

報告の中で取り上げることのできた具体的トピックは少ないが、ソード・ブレード会社時代からイングランド銀行に敵愾心を燃やし、1711年の南海会社設立後はその中心人物となった財政家ブラント (John Blunt, 1665-1733) の実践、下院秘密調査委員会の一員として活躍したハチスン (Archibald Hutcheson, c.1660-1740) の痛烈なバブル批判、そして1710年という早期に書簡中で表明されていたデフォー (Daniel Defoe, c.1660-1731) の農工相互促進型商業成長ヴィジョンの3点にとりわけ着目してみた。ブラントらの南海会社が時の政権との結びつきを強めて狭義の商業利害としての貨幣利害を追求し、結果的には空想の膨張としてのバブルに呑み込まれたとすれば、ハチスンはそれに対峙し、実体的な土地所有を根幹とする古来の国制論に基づいたカントリの立場からの会社批判を展開したと言える。ハチスンは南海バブルの内実を次のように表現した。Aが100, Bが300, Cが500, Dが1100の価値に及ぶ資金を順次持ち込んだ末に、総価値2000は増減しないまま、先行したAとBがそれぞれ400と200の利を得た反面でDが600の損失を出しただけに終わったのだと。つまりバブルを同一量の富の再分配の場として描いたのである。

他方で、デフォーの見解は広義の商業利害の表明と呼びうるものである。それは、手工

業における雇用が増して賃金が高まれば人口増加が生じ、消費の増大を介して土地改良が進んで地代が増加するという、農工業を基礎に据えた社会における富の一方的増大への展望を含んだものであった。すなわち、彼は土地利害と貨幣利害とを結合させうるものとしての商業の成長というヴィジョンを獲得していたのである。デフォーにおける商業は人々の想像や期待を信用の力に換えて積極的に活用しないではいられない営みであるが、そこにおける信用はあくまで太陽自体ではなく陽光、つまり実体たる農工業の成長を手助けする潤滑油に過ぎないとされている。彼の商業観はバブルのごとき熱狂とは縁遠いものだったと言えるだろう。

以上の報告に対して、フロアと次のような質疑応答がなされた。まず、前掲 **Wennerlind** の著書について、同書においては信用拡大と富の（有限性ではなく）無限性をめぐる言説との関連についての大局的分析が行われていることが確認された。続いて、信用には肯定的意味付けと否定的意味付けがあったこと、具体的には後者が金利生活者の増殖を指しがちだったことが確認された。非実体的な債権と利子収入への依存は自律を失わせて腐敗を招くとしたカントリの論客に対し、コート論客は信用を伴った商業が財の富裕化と同時に人格の富裕化を実現すると説いたこと、ゆえに、この時代の言説史を追うに当たってはコート対カントリの枠組が非常に大切であることを報告者は強調した。その後さらに、南海バブルはロー・システムとの連動を抜きに論じられないことから、ブリテンとフランスにおける国情の相異を把握し、両国における信用観、あるいは株式仲買人に対する評価の相違にまで深く切り込んだ分析を進めることが望ましいという指摘がなされた。

続いて安藤報告は、モンテスキューの商業論を手がかりとしながら、「土地こそが富の源泉である」というフィジオクラットの重農主義的命題を主権論の観点からの考察を試みた。

モンテスキューは『法の精神』において、各国家に空間的に限定される富（不動産）と、各国家を超えて全世界に属する富（動産）とを区別している。為替手形のような国境を越える富が、「どこにも痕跡を残さない目に見えない財産」とされる一方で、領域的に区切られた土地財産は「目に見える富」と定義される。そして、動産に関わる商業は、主権国家の枠組みに拘束されないコスモポリタンの思考を生み出し、商人たちは個々の主権国家を「巨大な〔商業〕共和国の一部」とみなすか「主要な海外支店」としか考えないようになる。こうした商業のコスモポリタンの傾向のなかに、フィジオクラットたちは主権国家のロジックを掘り崩す政治的危険性を見ていた。だが、18世紀のヨーロッパにおいて商業社会の勃興が否定できない現実であったことも確かである。それゆえ、「いかにして自由貿易を否定せずに主権国家のロジックを維持するのか？」という問いが、フィジオクラットの中心的課題となった。

ケネーの出した答えは次のようなものであった。すなわち、富の源泉はもっぱら土地に見出されるべき（＝富は領域国家の制御下にあるべき）であり、同時に土地生産物は自由な商業に委ねるべきであるというものである。こうして緊張関係にあった主権国家のロジックと自由貿易の原理が調停されていく。ケネーによれば、自由な商業は土地生産物の良

価を実現し、農業王国フランスの繁栄を約束するはずである。しかも、富の源泉は主権国家内に限定された土地であるため、完全な自由貿易を認めたとしても主権国家の基盤が掘り崩されることはありえない。「土地こそが富の源泉である」という重農主義的命題は、まさにこのような政治的意図に端を発するものであった。

さらにフィジオクラットは、土地単一税という税制改革を唱えることで、安定的かつ確実に財源を確保し主権国家の基盤を強化しようと企てる。それは、一定領域を支配する主権こそが各人の土地所有権を保障するという理屈によって、国家の租税徴収権と重農主義的命題とを結びつける企てであった。こうして国家の財政は「その姿がやがて見えなくなる富」(＝国境間を容易に移動する動産)ではなく、「目に見える富」(＝一定領域に限定された土地財産)に基づくことが期待される。これは同時に、個人が間接的にしか君主と関係をもちえなかった従来の社团的編成が変革され、土地への所有権と徴税権を通じて個人が直接的に君主と関係をもつようになったことも意味した。

こうしてフィジオクラットは、18世紀ヨーロッパにおける商業社会の到来に直面しつつ、重農主義的命題を公理のように打ち立てることによって、自由な通商のロジックと主権国家のロジックをうまく調停しようとしたのであった。

以上の報告に対しては、主として以下のような質疑応答がなされた。

「フィジオクラットの思想において信用に関する議論は存在しなかったのか？」という問いに対しては、J・ローの「システム」が崩壊した後、それをめぐる批判や評価がフランスで蓄積されたのは確かであり、たとえば、ムロンやデュトは「システム」を理論的に高く評価し、紙券発行による信用創出の可能性と実体経済への正の影響を深く論究した。しかし、フィジオクラットの著作に「信用」や「銀行」といった語彙はまず登場しない。ケネーが資本循環や拡大再生産のための資金投入過程(いわゆる「前払い」)を論じていたにもかかわらず、フィジオクラットの理論体系に信用創造の選択肢は入ってこない。後にフィジオクラットの重農主義的側面を相対化したチュルゴーでさえ「信用」や「銀行」について語ることはなかった。むしろ彼は、友人との書簡でローの著作を *grimoire* (悪魔を呼び出す祈祷書) と罵っている。フィジオクラットやチュルゴーにとって、ローのシステムは封印あるいは黙殺されるべきものであった、と応答がなされた。

「ケネーやミラボーはカンティロンの『商業試論』を読んでいたはずだが、その影響をどう考えるか？」という問いに対しては、カンティロンの構想した「地主中心モデル」がケネーに一定の影響を与えたことは確かであるとはいえ、カンティロンの議論展開は複雑で、閉鎖経済モデルの段階では地主を中心とし土地集約型の富を重視しているが、開放経済モデルの段階に入ると労働集約型の富すなわち製造業が重視され、果ては貿易差額による貴金属の蓄積を国富の指標にしている。この点で、自由貿易＝開放経済のレベルで土地生産物を重視したフィジオクラットと理論的相違が見られる、と応答がなされた。